筑波學生新聞

発行所
筑波大学学生新聞会
編集代表 奥村哲也
〒305 新治郡桜村天久保3-8-13高野ハイツA-105
TEL 0298(52)4460
振替 宇都宮6-31450
月刊 価格100円

受験生特集号・共通一次号

主な内容

受験生諸君 知的武装をせよ!

呉智英氏(インテリ職業)インタビュー

大学がその空間のみ示す"キャンパス"としか呼ばれなくなって久しい。アカデミズムが解体し切った後の"レジャーランド"に狂い咲いたお勉強ブーム=ニュー・アカデミズム・ブームも一九八四年とともに終焉し、再び渋滞の時代が続いている。一方、思想界では「保守化」「反動化」は叫ばれてはいても現状是認、俗物教養主義の保守派知識人は跳梁跋扈し、「進歩派」知識人は為す術もなく立ち竦んでいる。このような状況の中、原理的に思考し、「知」で武装し、既成知識人に敢然と戦闘を挑んでいるのが呉智英氏である。氏にインタビューし、国家論からマンガ論、原理運動を撃つ視点など幅広い話題に示唆を得た。受験生諸君の「知」への指針となれば幸いである。(文責・編集部)

呉智英(くれ ともふさ・「ご ちえい」も可)本名、新崎智。一九四六年愛知県に生まれる。七一年早稲田大学法学部卒。在学中は早大全共闘で活動。卒業後、会社勤めを五年で辞め、評論活動を「ガロ」「宝島」「朝日ジャーナル」誌上で展開する。著書『インテリ大戦争』(JICC出版)で、山本七平、竹村健一、渡部昇一、津村喬など"一流"文化人を徹底的に論破し、現在の"知"の退廃を告発している。また、「誕生から見据えてきた」マンガの分野での評論活動も注目されている。他の著書に『封建主義、その論理と情熱』『読書家の新技術』『大衆食堂の人々』(情報センター出版局)がある。現在マンガ論の新作を執筆中である。

無知は差別せよ

編集部 大学に入ったら本を読んだ方がいいんですか。

浅田彰がね、高校時代はチャート式しか読んでないけれども、大学に入ったらキチッとした本を読んで本当に勉強するんだ、なんていう教師を信じちゃいけない、と言っているけど、それはウソですよ(笑)。読んだ方がいいですよ。

同世代の三分の一が大学に行くわけでしょ。そのうち九割までは結局は本読んだって役にたたない。何の意味もない。卒業しちゃえば本なんて読めやしなくなるわけでしょ。そういう人に無理に強迫観念的に読めという風に言う必要はないけど、そういう人たちが読むことによって、本が大量生産でいくらか安くなってくれることもあるからね(笑)。それから、一割の人はそりゃ読んだ方がいい。

——どういう風に気をつけて読んだらいいんですか。

近代の教養というのは崩れかけているポンコツ車なんだよ。そのポンコツ車の部品を盗むってことは心掛けた方がいいよね。もう少し具体的に言うと、例えば、字の使い方とかは、どんな馬鹿なことを言う奴でもやっぱり年寄りが知っている。そいつが書いた物を読めば、字の使い方はわかるわけでしょ。情報源として部品を盗んでポンコツ車は絶対利用した方がいい。それが俺のいう知的武装なんだよね。

——やはり教養があるのをいばった方がいい?

やっぱりいばった方がいい。無知は差別した方がいい。馬鹿より格好つけている方がいい。

——読書が九割の大学生に役に立たないということは、近代日本の教養のあり方として、読書は青年期だけのものであるという考え方、そしてその背景として日本近代の青年の自我のあり方が特殊だったことがあるわけですね。

それは非常に難しい問題ですよね。近代というのは、青年のメンタリティーにアピールする時代であったという特殊性があるわけ。これに自我の問題が関係してく

近代の教養はポンコツ車

情報源として部品を盗め

る。近代における自我のあり方が、青年の自我のあり方と一致する形で、近代精神って言うのが勃興してきたという要素があるんです。少し具体的に言えば、七〇年代に新しい女権論者として非常にもてはやされた高群逸枝という人の場合、その自己形成のプロセスを見ると露骨に表われている。共同体的なところから解放されるというのが近代精神の重要な要素なんです。人間が親や社会のくび木から放たれ、青年として自立して一人前になってゆく。その時の自我のあり方と非常に似ている。

——夏目漱石の『三四郎』の主人公が典型的なように、地方から都市に出て来て、共同体なり、家の論理なりに対してアンチとして自我を形成してゆく——。

そう。青年の自我はいつの時代も常にそのようなものとしてあるし、それは近代精神のありようによく似ているんです。そのため、明治以降、青年の自我のありようは必要以上に増幅された部分がある。二十五歳なり三十歳なりになって青年でなくなった時、あれは増幅された虚妄に過ぎないと言って転向がおきる。

転向はいつの時代でもあるわけで、豊臣につくより、徳川につく方が「得」だから裏切るとかね。その一方に豊臣こそが真の世の中にしてくれると考えて、徳川の世になったら腹を切って、転向しない人もいる。

ところが、近代の転向はそういう問題ではない。戦時中の転向だと、共産主義で転向する人は共産

青年期の自我に似る近代精神

主義はウソだったという形で転向している。戦後七〇年代なんか、弾圧が厳しくないのに、学生運動やっていた人が社会人になるとどうも今まで教えられてきたことはウソだということで転向しちゃう。ウソとかホントとかというのを別の言い方で言うと、建前か本音かという選択になる。

ところが、建前主義がウソだから、"生活者の論理"というか、本音主義に行っちゃうわけだけど、その本音主義も本当はウソだっていうことに気付かないというのは非常にまずいわけ。そういうところをいい加減にしているから、進歩的文化人はここ十年ばかり、保守的文化人にやられてばかりいる。

芳賀登の強さ

——本音主義もやはり虚構ですか。

そんなもんうそですよ。

例えば、今の世の中は誰が作ったか、というと狂信的な革命家でしょ。ロベスピエールとかルソーが滅茶苦茶なことと言ったからこういう世の中になったわけです。フランス革命なんかもう滅茶苦茶でバスチーユの監獄の襲撃なんて言ってるけど、バスチーユには政治犯なんて一人もいない。強姦魔とか放火魔とか悪い奴ばかりいたんで、釈放された囚人もびっくりしてるわけ。民衆がロベスピエールなりダントンなりにアジられて激昂してやってしまった。今の民主主義社会は非常に穏健なすばらしい社会なんていってるけど、それは狂信的建前主義者が作ったものなんです。そのことをウソだといったら、本音で「いまあるものはすべてすばらしい」と言ったところで、みんなウソになってしまう。

ところが進歩的文化人はフランス革命が建前でできたなんて言わない。民衆は本音から怒りを燃して…なんて言うから、保守派に対抗できない。最初から民主主義は滅茶苦茶だと言って、だけど正しいことは正しいと言えばどういう論理にも対抗できたわけ。進歩派が全然保守派に対抗できなくなって負けてるのは根本的には最初に自分がウソ言ったからだね。保守派が正しいことを言わなくても負けてしまうわけ。芳賀登って言うのが筑波大にいるじゃない。

——民衆史が専攻の教官で、現在厚生補導担当の副学長です。

そういった問題について、彼な

社会変革は何となく起こる

シナ革命は『水滸伝』のセンス

んかすごい研究してるわけでしょ。そういうのが筑波で学生担当の副学長をやっている。この体制派の強さには対抗できない。

保守派にはかなわない

——そうですねェ(笑)。しかし『朝日ジャーナル』なんかで保守派の文化人のボロも暴かれ出しているんではないですか。

渡部昇一なんか専門の英語学では緻密なんだけど他の所で杜撰なところがあるんだ。山本七平もそうね。でも山本七平が言いたいことは「日本人はトロイこと言ってるけどリアリズムを持たなきゃだめよ」という一点だけなんです。あの人が実証であげているのはみんなウソだとしてもその一言だけは本当だってことはある。そこで渡部、山本が開き直れば『朝日ジャーナル』に勝てるよ。「私は無学だからほとんど間違ってました。でも日本はこのまま脳天気なお調子者のようなことを言っちゃだめになる。この一点についてはどうですか?」。こう言われたら本多勝一だってかなわない。最後には人間、我が身がかわいいと言うけど、これを言われたらどうしようもないよ。

——どうすれば勝てますか。

新しい思想が出てこなきゃだめだ。

——その"新しい思想"ということで、呉先生は"国家論"の本を構想されていると聞いたのですが。

国家論とかやっている人はいないんだよね。実証研究している人はいるけど、自分で新しい思想の方向性を出している人はいない。左翼系の人は国家はいけないんじゃないかという論理を出すけどそうじゃない。

例えばインドシナ難民なんかそうでしょ。国家の後ろ楯を失くした人間がいかに寂しいか。インドシナ難民の船なんか見つかると、近所の国の漁民はたちまち海賊に早変りして、強姦されるわ、略奪されるわ、殺されるわ、それで泣き寝入りだね。民衆は国家を嫌がっているというのはウソだ、ということになると、国家とは何か、という大問題になる。

進歩的文化人は、保守派になにやっても負けるので、自由民権運動を掘り起こして、国権に対して民権がある、などと言う。僕は国権も民権もウソだという視点を作らなければ、というのまでわかった。あと、それをどう展開するか……。

近代が始まって以来、権力論が二つあって、体制側の国権論に対して民権論を言えばいいということだった。しかし、民権論からはスターリニズムとかインドシナ難民の問題も生まれているわけですからね。国権、民権とも近代国家が生んだ双生児で、どちらをとっても同じなんです。

——フランスなんて共和制と独裁制の繰り返し、みたいな形でそれが出て来ますよね。

独裁制も共和制も実は同じものなんだからね。

我々がナショナリズムを考える

事実主義で批判できない

拡張する原理運動

前に、ナショナリズムとデモクラシーは対立しているという考え方があるね。

ところがナショナリズムはフランス革命のとき初めて発生した概念で、それまではなかった。民衆は小さな共同体でしか生きていなかったのを、フランス語、あるいはフランス文化圏をネーションとして組み上げるため、民衆を啓蒙しなきゃいけなかった。啓蒙するというのは民衆を型にはめるわけで、そのためには、啓蒙する方が望まれるべきネーションとかピープルのプロトタイプを持ってなければいけないわけ。そしてそれを上からおさえつける感じが国権論、下から盛り上げるのが民権論。だから基本的に同じわけ。

ルソーなんて日本では民衆のこと考えてたみたいに言われるけど、ヨーロッパやアメリカでは全体主義の祖とも言われてるんですよ。

民主主義というのはもともと全体主義であるわけです。多数派への屈服が民主主義なのだから。

進歩派は、そういうことを言うのは敵を利するというので言ってはいけないと言う。筑波大学にいるような頭だけはいいような学者にそれはウソだと言われると、オタオタして反論もできない。反論できないから困って自由民権運動の調査に秩父の方へ行き、聞き書きとかして、民衆はこんなに戦ったんだ、みたいな話をする。あの色川大吉なんて本当にどうしようもない。あんなのウソばっかりですよ。民衆はどっちの方へ戦うかわからない。ファシズムの方へ戦うかもしれないし、朝鮮人虐殺もシナ人虐殺も民衆がやったんだよね。

先送りされたツケ

——しかし、国家論というのは結局理想国家への変革を前提としていると思うんですが、現実には我々の社会は結構豊かで民衆は変革を望まなくなってるんじゃないですかね。

変革は必要とされるのではなくて、信じ難いことだけど、ある日突然何だかわけのわからない形でおきてくる。

我々の社会が満たされている、ということは、どういうことかというと、いろんな意味でつけを先おくりにしているということなんだ。水俣病とかヘドロの問題なんていうのはつけを先送りにして、後でまわってきた実例ですね。

また、東南アジアで安い労働力を抑圧する形で働かせてこちらは楽してヌクヌクしているとする。

これに対して社会党などは対応できない。社会党が政権とって、東南アジアの人達の味方になって日本の民衆に貧しさを強制し出したら民衆の怒りは爆発し、社会党は権力を持っているから、これを弾圧しなければならない。

従ってこのような形での社会変革がおきるというのは論外ですね。

例えば一つは、宗教のような形で起きてくるのは考えられる。

日本の新興宗教が興きてきたのは後進地域ではなくて、幕末の近畿とか中国地方のようにある程度豊かで、社会矛盾が集約されているようなところで出て来ている。金光教、天理教、黒住教なんかそうです。東北からは出てこない。

もう一つはローマ帝国の崩壊みたいな現象がおこるんじゃないか。

ローマ帝国が崩壊したことを我々は歴史の教科書で習っているかもしれないけど、これは冷静に考えると不思議なんだよね。

ローマ帝国というのは強大で、他の民族とかユダヤ人とかを弾圧して、ユダヤ人は「クソー、いつかメシアが来るぞ」とか言って、キリスト教が出来るわけ。これがある日突然、ローマの国教になってこれを信じないと弾圧されるようになる。こんな不思議なことはない。ユダヤ人が、貧しくて差別されているので苦しいから拝んだりする、これはわかる。それが今度、豊かな民衆のメンタルなものが崩壊してゆく中にバイキンのように入ってしまう構図なんだね。

要するに社会の変革は、民衆が改革するという形ではなくて、否応なくつきつけられていくんだね。

今までの変革なり変動のメカニズムは民衆が「望むか、望まないか」ということで考えられてきた。

シナの民衆運動についての宮崎市定の研究に対するマルクス主義側からの批判はそれに基いているんだ。シナの共産党の公式見解では、太平天国の乱も農民運動と捉えている。でも調べてみると全然違っていて、「何となく」始まって、「何となく」終ってるんだ。この「何となく」とは何かが難しい。

シナ革命だってそうだよ。中国共産党の幹部でマルクスの本を読んでたのは初期の陳独秀とか、李大釗ぐらいだからね。

毛沢東と『水滸伝』

——毛沢東は『水滸伝』なんか読んでいる。

そうそう。子供の頃、『水滸伝』読んでメンタリティー育てて、その後読んだのはせいぜい、シナ語訳の『共産党宣言』ぐらいと言われている。あとは一切読んでない。

【二面につづく】

受験生特集共通一次号特別企画

筑波大学二次試験
主要三教科の傾向と対策

新制度入試の施行により、従来より十日余り遅く行われた共通一次試験。一息つく間もなく自己採点、二次試験願書提出。私立大入試も始まるという超過密スケジュールが待ち受けている。また一月後の国公立大二次試験は、一次試験とは打って変わって、記述論述試験が主体であり、また違った対策をたてなくてはならない。今回、ここに掲載する二次試験の傾向と対策は、渋谷ゼミナールの講師の方方に、筑波大学の二次試験の主要三教科に焦点をあて予想・解説していただいたものである。是非これを参考にして二次試験も突破して欲しい。諸君の健闘を祈る。

英語

I 総論

どの国公立大学の二次試験についてもいえることであるが、二次試験は一次試験と比較するとかなり程度が高くなっている。このことは筑波大についても例外ではない。従って一次試験の結果が良かったから二次試験も高得点が得られるという保証にはならない。そして筑波大では半数近くの学類においては二次重視の配点になっているので二次対策には充分な配慮が必要である。

筑波大の二次試験の問題数は学群にかかわらず三・四題である。そしてそのうちの二・三題は長文の読解であり、一・二題が英作問題となっている。この型は今年度も変わることはないであろう。従って下記の各論においては過去の傾向にそって問題を分析し、今年度の対策を提示したい。

II 各論

A、読解問題について

〈傾向〉 筑波大の読解問題には以下のような二つの明確な特徴がある。第一は読解の対象となっている文章の内容に特徴がある。すなわち小説のような主観性を持った文章が皆無であることである。例えば昨年度の人文・比較文化・国際関係学類での1番の読解問題は言語論であり、2番は芸術論であった。このような傾向は昨年度以前の問題においても顕著である。

第二は読解に対しての設問の文法に特徴がある。すなわち大部分が記述形式となっていることである。なぜこのような形式になっているかは明らかである。すなわち共通一次においては全問題が客観形式なので、二次において受験生の本当の実力を見分けたいからである。

〈対策〉 ではこのような二つの顕著な特徴を持った読解問題に対してどのように対処すべきであろうか。以下に最も重要な三点を記しておく。第一に重要なことは読む文章の内容選択をすることである。傾向分析のところでも触れたが小説類ではなく論文的なものを多種にわたって読む必要がある。例えば文化論、言語論、科学論、社会論などである。そしてこれらを読む時にそれぞれの分野での特有の表現に慣れることである。第二に重要なことは文章の細部までの理解は不問にしても大意を短時間のうちに読む訓練を積むことである。なぜならば百二十分という限られた時間内に筑波大が出題するような読解問題を解くには速読力がなくては不可能だといっても過言ではないからである。このためにはあらかじめ時間を決めて、その時間内に文章を読み切る練習をすることが大切である。最初は時間内に読了しないかもしれないが、練習をすることによって必ずできるようになるものである。第三に重要なことはこれらの論文を読む時にただ漠然と読むのではなく問題意識を持って読むことである。いつもこの論文は何を言いたいのだろうかと考えることである。そしてそこに書かれている要旨を実際に鉛筆を手にとって書いてみることである。なぜならば頭で理解していることと文字によって書き表わすということはまったく別の事柄だからである。

B、英作問題について

〈傾向〉 英作問題の大部分は部分訳である。そしてその文章は口語文よりも堅い日本文の方が多い。内容は多種にわたっている。

〈対策〉 上記の形式で出される英作問題を解く上で必要なことは下記のように三つある。第一は部分訳であるということは、該当する日本文にだけ目を向けるのではなく前後にも向けなくてはならないということである。すなわち全文の流れの一部として訳出することが求められているのである。この際特に代名詞、時制の使用法に注意する。第二はいくら堅い日本語で書かれていても自分でもっと平易な日本語に言い換える訓練をすることである。この言い換えができれば英作の半分はできたといっても過言ではない。そしてその平易になった日本文を英語に置き換えるのである。第三に英作問題で受験生に問われているのは上手な英文を作ることではなく、誤りのない英文を作るということであることを忘れてはならないということである。このためには誤りのない文法とスペリングを心がけなくてはならないということである。

（桑原五郎先生）

国語

ここ数年、現代文二題・古文一題、漢文一題の計四題の出題数が定着している。一九七九年度まで単独出題されていた「作文」が、八〇年度以後、現代文の設問の中にとり入れられている。設問は、すべて記述・論述式で、早く正確に読み取る力が求められており、百二十分の試験時間では、やや時間的に苦しめられそうである。

「現代文」

論説文と文芸文との組み合わせとなっている。七七年　森鴎外「高瀬舟」・ポルトマン「人間はどこまで動物か」、七八年　B・ラッセル「哲学入門」・中村光夫の文芸評論、七九年　中村雄二郎「哲学の現在」・井上靖「おろしや国酔夢譚」八〇年　清水幾太郎「現代論文の文章」・幸田文「啾啾」、八一年　中村光夫「読書について」・森鴎外「サフラン」、八二年　山崎正和「人間と環境のドラマ」・梶井基次郎、八三年　谷川俊太郎「言語から文章」・井上靖「道」、八四年　時枝誠記「国語学原論続篇」・志賀直哉「朝顔」。いずれも、入試にお馴染みの著名な評論家や文豪の作品である。特に論説文では、哲学や国語学に関した作品が多いことに注目したい。また、中村光夫・森鴎外・井上靖などが、三・四年おきに繰り返し出題されていることにも注意したい。来年度は小林秀雄や山崎正和、夏目漱石などにも注意したい。

設問形式は、全問記述形式であるが、「どのようなことか説明せよ」の形式が多く、三十字から百字の説明が求められており、文章力を養成しておくことが不可欠である。「同一内容の部分を抜き出せ」の形式も多く、速読による内容吟味が必要である。指示内容などの正確な読み取りを学習しておこう。文芸文においては、当然のことながら「心情」説明に関する設問が多い。「心情の移り変わりを説明せよ」、「そのように感じたのはなぜか」、「どのような気持ちが込められているか」など。

論理的文章は、筆者の意見、主張を、文学的文章においては、人物の感情を、それぞれ正確に読み取ることが必要である。特に四百字の作文が組み入れられていることに注意して、常日頃から、文章を分解して読み取るテクニックを練習し、筆者の主張のまとめや要約、自分の意見を入れて感想を書くことなどの訓練をしておくことが大切である。

「古文」

例年、中古の著名な作品が出題されている。七五年「源氏物語」、七六年「万葉集」、七七年「更級日記」、七八年「今昔物語」、七九年「源氏物語」、八〇年「枕草子」、八一年「伊勢物語」、八二年「大鏡」、八三年「宇治拾遺物語」、八四年「枕草子」。

「誰の、どういう動作、態度か」「その根拠は何か」「その理由を説明せよ」など、正確な読解力が要求される。本年度は「清少納言は、男とはどういうものであると言っているか説明せよ」と、筆者の主張を把える設問も出された。「かかる仲ちい」「かかること」など、指示内容を細かい部分まで正しく記述することが可能か、日頃の学習の効果を細かく求められる。その他、「いなむとしければ」「はかばかしう来でやみにしかば」などの品詞分解、「おはします」の意味上、文法上の違いなど、基本的事項の設問もある。文章完成問題とか、文学史問題などは影をひそめているようである。中古の作品を多読して、内容を的確に読みとることができる力を養っておくことが大切である。

「漢文」

これも、著名な作品が多い。七六年「史記」、七七年「三体詩・才子伝」、七八年「蘇東坡集」、七九年「唐詩選」、八〇年「唐宋八家文読本」、八一年「説苑」、八二年「孟子」、八四年「韓愈(答劉正夫書)」。

「詩」→「文章」→「詩」→「文章」の流れに、思想が入り込んだか、また「文章」へと戻っている。全体的に「唐」を中心とした作品が多く、「唐宋八家文」が目につく。「史記」「十八史略」などに注意したい。

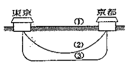
設問の形式は、古文と同様内容吟味のものが主である。「なぜか」「どういうことか」、また、「是、の指す内容は」など、説明するものである。やはり、細かい、正確な読解力が必要である。「書き下し文」はすべてひらがなで「不敢——」「則——」「未嘗不——」「雖——為——所——」などのように、訓読上の特殊文字を含み、句法をなす部分の読みが問われるから注意しよう。現代語訳も求められるが、やや難。いずれにしても、唐宋八家文を中心に、文章を読みこなす力を身につけておくことが大切である。

現代文、古文、漢文ともに、深い読解力と、適確な文章表現力が必要である。構成を考えながら読み、要旨をまとめる訓練を怠らないようにしよう。合格を祈る。

（正樹俊彦先生）

数学

東京から京都へ行くのに最も速く効率のよい行き方は何であろうか!?　左図に示した①②③の中から選ぶと、①は距離は最短であるが、加速が悪く、③では加速は良いが距離が長過ぎて時間がかかる。実は②が最短時間で行けるコースとなり、何と10分たらずで行くことが出来るのである。これは微分方程式の問題で、その曲線はサイクロイド曲線になるのだが、もちろん摩擦によるエネルギー損失は考えないものとします。最近の筑波大学の入試問題をみると、全般的には標準的問題が多く、微・積分に関して最低3題は出題されている。その他では、行列・数列などの融合問題が多く出題されているようである。さすがは、1973年，文部省が理想的大学をかかげて現在の筑波へ移転しただけあり、良問も多く、どの項目も手が抜けず、単なる計算力だけの出題は少なく、総合力が要求されるようである。

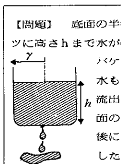


（表）

	代数・幾何				基礎解析			微分積分					確率
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	積分法の応用	[illegible]	積分法の応用	[illegible]
84年											○	○	
83年												○	
82年												○	
81年										△			△
80年												○	
79年										○		○	
78年												○	[illegible]
77年													[illegible]

上記の表を見ても微積分の応用の出題が主流であるが、内容的にはあくまでも総合力である。そこで今回は、冒頭にも述べたように微積分の応用としての大学入試レベルの問題として、『バケツの問題』をとりあげてみたい。

【問題】　底面の半径 γ の直円柱のバケツに高さ h まで水がはいっている。いまバケツの底に亀裂が生じ、水もれが起こったとする。流出する水量の速さは水面の高さに比例し、1分後には全体の α %が流出したとする。t 分後にバケツに残っている水量はいくらか。



【解答】　時刻 t のときの水面の高さを x，水の容積を $V(t)$ とすると，

$$V(t)=\pi\gamma^2 x \qquad \text{①}$$

流出する水量は x に比例するから，k を比例定数として

$$\frac{dV(t)}{dt}=kx \quad (k<0) \qquad \text{②}$$

とかける。

題意より，全体の水量は，$t=0$ のときで

$$V(0)=\pi\gamma^2 h \qquad \text{③}$$

$t=1$ のとき，全体の水量 $V(0)$ の α %が流出するから，

$$V(1)=\left(1-\frac{a}{100}\right)V(0) \qquad \text{④}$$

①②から

$$\frac{dV(t)}{dt}=\frac{k}{\pi\gamma^2}V(t)$$

$$\therefore \frac{dV'(t)}{V(t)}=\frac{k}{\pi\gamma^2}$$

$$\therefore \int\frac{V'(t)}{V(t)}dt=\int\frac{k}{\pi\gamma^2}dt$$

$$\therefore \log V(t)=\frac{k}{\pi\gamma^2}t+c$$

$$\therefore V(t)=c\cdot e^{\frac{kt}{\pi\gamma^2}} \qquad \text{⑤}$$

一方，⑤と初期条件③より

$$V(0)=c=\pi\gamma^2 h$$

また，⑤と初期条件④より

$$V(1)=\left(1-\frac{a}{100}\right)c=c\cdot e^{\frac{k}{\pi\gamma^2}}$$

$$\therefore e^{\frac{k}{\pi\gamma^2}}=1-\frac{a}{100} \quad \text{よって}$$

$$e^{\frac{kt}{\pi\gamma^2}}=\left(1-\frac{a}{100}\right)^t$$

ゆえに t 分後のバケツの水量は

$$V(t)=\pi\gamma^2 h\left(1-\frac{a}{100}\right)^t \cdots\cdots(\text{答})$$

以上の結果から，時間がいくらたってもバケツの水はなくなることがないことがわかる。もちろん $t\to\infty$ ならば $V(t)\to 0$ に収束することになるのですが，バケツの底に穴があいていても，水は全部はなくならないという。興味深い結論になるのです。最後に，大学受験にあたって，偏差値を無視して進路指導は出来ないと言われています。そこで一言！

$$\boxed{\text{偏差値}=\frac{x-m}{\sigma}\times 10+50}$$

x：自己の得点　m：平均点　σ＝標準偏差

と表わされ，あくまでも，受験者全体の中にしめる自己の得点の相対的割合を示す数値であり，必ずしも自己の成績ののびを表わす量でないことに着目したい。ですから偏差値にふりまわされることなく，最大限にそれを利用して進路を決めてほしいものです。受験生の健闘を祈ります。

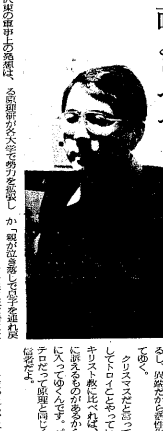
$$\left[\ \sigma=\sqrt{\frac{\sum(x_i-m)^2}{n}}\ \right]$$

（確率・統計で既出）

（野出順重先生）

さあ追い込みだ　頑張れ受験生!!

一面よりつづく



——毛沢東の軍事上の発想は、社会主義革命というより『水滸伝』的世界ですからね。

そう。そのセンスで革命がおきちゃうんだからね。

——先の話に戻りますけど、今の日本でそういう変革への兆しってあります？

原理は宗教

やっぱり原理運動じゃない？（笑）

——統一協会系の学生組織である原理研が各大学で勢力を拡張し再び問題になっています。『朝日ジャーナル』で、原理運動に関するキャンペーンも張られていますが……。

ジャーナリズムの作業として、事実を報道してゆくというのは当然だし、原理は敵だからどんどん粉砕していい。しかし何を粉砕しているのかわからず粉砕してもしょうがない。『朝日ジャーナル』なんかの報道に流れている思想はものすごく単純なんだよ。「原理は韓国政府とつながっている」とか「原理にオルグされたため人生が滅茶苦茶になった」人の手記とか「親が泣き落しで息子を連れ戻しに来たのに、子供は狂信者になって戻って来ない」「親がかわいそうだ」「原理は悪い…」こんな論理は成り立たない。浅間山荘だってそうだった訳だし、左翼運動に入って人生滅茶苦茶にされた人だっているわけです。だから、そういった論理で原理が悪いといっても、なんで原理が悪いのか？ということになる。

——宗教の問題として押さえなきゃいけないんですね。

そうそう。キリスト教と原理を分けること自体、かなり変だと思う。むしろ原理は、キリスト教のプロトタイプ（原型）を持っているし、異端だから活性化して伸びてゆく。

クリスマスだと言って聖歌隊出してトロイことやっている正統的キリスト教に比べれば、一人一人に訴えるものがあるから、心の中に入ってゆくんです。パウロ、ペテロだって原理と同じくらいの狂信者だよ。

——今だったら、二人とも原理やってる。

そうだよ。だから原理を精神異常者みたいな形で突くのはデマゴークだね。

『朝日ジャーナル』でやっているのは太平洋戦争で米軍が流したデマと同じですよ。確かに日本軍はシナでも殺戮しているし、フィリピンで滅茶苦茶やってるから、それを叩くのはいいけど、だからイエロージャップは下等なんだという論理はいけない。原理はかなり重要な問題をつきつけているのに、事実を報道するだけで、裏の[illegible]報道すれば"主義"になるとでも思っている。これは単なる"事実主義"だね。

マンガと文学

——ところで、呉先生は一方でマンガ評論家として活躍されていますけど、マンガという表現形態を重視されるのはなぜですか。

俺の本（『読書家の新技術』）で本を「知る本」と「味わう本」にわけているが、フィクションは「味わう本」にあたる。「知る本」は今でも読むべき本はいくらでもあるわけです。しかし、「味わう本」の場合は、二、三十年前はそれが文学であったわけで、若手では大江健三郎とか、安部公房とか、年寄りでは井伏鱒二、谷崎潤一郎、あと森鴎外なんか読まなきゃいけない本としてあった。でも今では読まなきゃいけない文学作品なんてなくなっている。マンガ本の方によっぽどあるわけです。一昔前の大衆小説みたいに大がか[illegible]てというのもマンガにはあるし、小味のきいた心理描写をしている作品もある。荒唐無稽なもの、高級風のもある。文学がやったくらいのことはマンガでやり尽してしまっている。大体ハードカバーの本で純文学と左翼系の本は売れない。この二つの筆頭だね。全然売れなくてもいい。何にも意味ないものだからね。

——マンガの方が表現形態として文学より秀れている？

いや、近代文学の発生から現在までを一世紀とすると、これをマンガの場合、二、三十年で圧縮してやっているだけで、マンガもいずれ文学と同じハメになりますよ。人間の思考の枠組みなんて限られているから、もうマンガも文学が飽和状態になったのとかなり近い状況になりつつある。それから側作者のメンタリティーも似てきて今では昔「文学青年」がいたのに対し、「マンガ青年」といわれる人達が出てきている。

合格体験記

筑波大学 人文学類　中山 仁（武蔵予備校）

二次試験までの時期がなんといっても受験生の正念場。この時期に勉強するかしないかで合否が決まってしまう。特に現役生は最後の追い込みによって実力以上の大学に受かることができるといわれる。模擬試験で合格圏にはいっている人も安心しきっているわけにはいかない。

さて、この時期に何をやればいいかというと昨年から積み重ねた勉強の集大成だろう。英語や国語の場合、新しい問題集に手をつけたりせず今までやってきた問題集やテキスト、それに模擬試験を復習すること。社会の場合、二次試験が論述形式になるため新たな対策をたてる必要がある。つまり〇〇字以内に論述することを練習しなくてはいけないのであるが、残念なことにあまりいい問題集がないのである。解答がでたらめなものばかりなのだ。そこで予備校や高校の先生に自分が書いた答案を添削してもらうのがいいと思う。初めは教科書を見てもいいから時間をかけて取り組んでほしい。

次にこの時期の過ごし方であるが、まさか一月にもなって夜型勉強から昼型勉強に切りかえていないということはないだろうか。試験は昼間にあるのだから、その時に集中力がでるように予備校の授業を受けたり、友達と一緒に図書館で勉強するのがいいだろう。一人で部屋にこもっていても実力が上がるとは限らない。

試験の当日に極度の緊張が生じないよう健闘を祈る。

筑波大学 人間学類　本澤 あゆみ（志学塾）

浪人をする際に、マンモス予備校には、どうしても馴染めず、一クラスの人数の少ない志学塾で一年を過ごすことにしました。志学塾との相性が良かったのか、共通一次の得点を現役時代より百七十点もアップさせることができ、筑波大に合格することができました。

浪人時代には、苦しかったことも多かったのですが、今となっては良い思い出となっています。

筑波大学 農林学類　内田 英憲（現役）

下宿生だった僕は、共通一次が終わると、下級生や仲間を集めて宴会を続け、さわいで過ごしてしまった。

ふと気付くともう二月。そろそろやらねばと思って始めたのが「解法と探求」だった。例題だけは、と思ってがんばった。なんとか二十日間で終わらせ、あとは受験校の「赤本」を使って傾向をつかんだ。

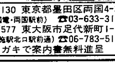
疲れたら図書館へ行った。ここは受験生の社交場だ。喋りながらの勉強も、思ったよりはかどり、疲れも少ない。

筑波大の英語は英文和訳が勝負だ。長文問題をできるだけ多くこなし、大意を取る練習をした。和訳の場合、大意がわかれば、訳する部分にわからない単語があっても意外になんとかなる。

筑波大学 国際関係学類　荒木 晋（現役）

共通一次が終ってからというもの、空気が抜けたようになって、長い間ボーッとしてしまった。ふと気がつくともう二月なかば。さすがにこれじゃいけないと焦った。この焦りがよかったのか、短期間で集中的に勉強できた。

すでに学校は休みなので、どうしても勉強時間が深夜になってしまった。午前零時にインスタントラーメンを食べるのだけが楽しみの毎日だった。寝るのはだいたい午前五時、起床は午後だった。この生活が身についてしまったため昼間の試験中に眠くならないか、とても心配だった。少しずつ時間をあわせて朝起きる習慣に戻そうとしたけれど、なかなか簡単には戻らなかった。気をつけた方がいい。



現役学生が提供する、絶対に市販されていない「決定版」

茨城県内国立大学案内

徹夜を重ねて勉強を続け、「もう」というより「やっと」共通一次試験を迎えた受験生諸君の中には、二か月余り先の大学生活に、色々とあらぬ期待を寄せている人もいるに違いない。やっと親元を離れられる、たばこも堂々と吸える、酒も飲み放題、毎晩麻雀して、それから……。けれどもその一方で、「大学は地元国立大のみ、浪人もだめ」などという親御さんのきついお達しに複雑な気分の受験生もきっといることだろう。しかし、その点、茨城県民である諸君の何と恵まれていることか。国立大は県内に三つ、そのうち二つは総合大学ときている。こんな県はそう滅多にない。そこで、県内各国立大の現役学生から、決して市販されていない「受験案内・決定版」を提供しよう。

県内大学中一番の古株

通称「いば大」 キャンパスは3地区に

茨城大学

なんと言っても、茨城県の大学の中では一番の古株で通称いば大という。水戸地区には教養部・人文・教育・理学部が、日立地区には工学部と工業短期大学部が、阿見地区には農学部が、それぞれある。学生は約半数を県内出身者が占め、男女の比率はおよそ二・五対一である。

教養科目は水戸で

教養部

人文・教育・理学部の学生は最初の二年間、工・農学部の学生は一年間教養部に在籍し、一般教養課程と呼ばれる授業を履習しなければならない。その後各学部へ移り、専門教育課程となるわけだ。しかし多くの学生が三年になっても一般教養を履習している。単位数不足の人はもちろんだが、上限があるわけではないので、興味のある授業をあき時間にききにいくというまじめな学生も少なくないようだ。

人文学部

人文学科と社会科学科の二学科より成っている。人文学科は二年次当初に専攻の所属が内定する。一方社会科学科は、三年次より四十一あるゼミナールのいずれかに所属する。いずれの場合も志望者が多い場合には、何らかの調整(適正を見るためのレポート提出等)が行われる。

よく、教養部では「暇な(あき時間の多い)社会科学科」と耳にするが、専門に入ると、専攻会やゼミで忙しくなるそうだ。

また、昨年度は、LL・AV教室等も設置され、施設が一番充実しているのも人文学部であろう。国語、英語の教員免許は社会科学科では取得できないので注意。

教育学部

小・中学校、養護学校の教員の養成を目的としている。やはり、茨城県の先生になるなら茨大の教育学部である。事実四、五年前は、県教員採用試験を受けた学生の九割以上が、合格した。しかしここ数年、教員の募集人員が減っているので、合格率も下がっている。今年度は、小学校で五七%で過去最低、中学校では七三%、高校や養護教諭その他が約七〇%と、かなり厳しいものになっている。

理学部

これといって特徴はない。が、三年計画でなんとか単位を取るような授業もあるという。一年目はさわりだけを聞いて、二年目に猛然と勉強し、三年目にお情けで単位を出してもらうとか。また数学・化学科以外の学科は、必修科目が多くないので、かなり自由な授業選択が可能だ。工学部や農学部と同じく、実験が課され、夜中の三時まで続けることがしばしばという科もある。

工学部

最近、茨大とUAB(アラバマ州立大学バーミンガム校)が学術提携したことにより、工学部の学生は、毎年数名UABへ国費留学できるようになる。また、電気産業の景気のよさを反映して、さらに、世界の大企業日立があるため、就職先には事欠かない。毎年、平均すると学生一人あたり十七社以上から求人が来ている。

しようがない事ではあるが、女子が少ない。学科にもよるが、全体の男女比は三十対一程度だ。自動車所有者の多いのも工学部ならではといえる。

農学部

阿見町の、附属農場と隣接していて、環境はよい。以前一度だけ共通一次の試験場に使われたが、校舎の老朽化が激しく、その後は使用されていない。だが近年のうちに、常磐線の駅から五キロメートル以内、水戸地区から十キロメートル以内の場所へ移転する可能性大。今は科学万能で騒いでいるが、農業県である茨城にとっては(ひいては人間が生きていくために)軽んずることのできない学部である。

また、求人数はそれほどでもないが、工学部と共に最も就職率がよい。

上　茨城大水戸キャンパス。人文学部棟。
下　同上。右奥は体育館。

学生寮は格安

サークル

現在、茨大には百十七のサークルがある。学生のサークル加入率は、七割とも八割とも言われる。そして、それらのサークルの間で今一番の話題となっているのがサークル棟新築問題である。

茨大の外観をそこねている最大の原因は、旧兵舎をそのまま転用したサークル棟。老朽化が激しく、消防法でも危険物の指定を受けているこのサークル棟を建て直そうという動きがあるのだが、敷地面積が半分に減る、利用時間が制限されるなどの問題があり、まだすぐには実現しそうにない。

また、毎年行われる茨苑(しえん)祭やコンパの際には、ミニ慶応と呼ばれる常磐大学や同短大、茨城キリスト教大学や水戸女子短大と交流の深いサークルもある。

車

毎年夏休みが終わると、キャンパス内の様子が変わる。新入生が車に乗ってくるからだ。その大部分は新車である。

大学に合格したら、車を買ってもらう約束をしている人もいるかもしれないが、茨大志望者は、その約束を変えた方がよい。狭いキャンパスの有効利用と、事故・騒音の一掃のために、近いうちに車の乗り入れ禁止となるかもしれないからである。つまり、車での通学は駐車場を借りねば不可能となる。それでも中には、遊びに車は絶対必要だという人もいるでしょう。そんな人は覚悟して……。

下宿

水戸市もいなかの大都市であるため、下宿代も大きな幅がある。安い所では四畳半一間で七千円。リッチな人はバス・トイレ・キッチンつきで二部屋四万円。大半の学生はバス・トイレ共同六畳間の一万五千~二万円程度の所に下宿しているようだ。まかない付なら四万五千円前後が相場だ。

茨大には学生寮もある。水哉寮などは寄宿料は格安で、一ヵ月わずか三百円である。四人相部屋であり、規則があるにもかかわらず、毎年、入寮希望しても漏れる人がいるそうだ。

なお下宿は大学事務局学生部であっせんしてくれるので不動産屋に頼む必要はない。

(茨城大四年　二川　大)

筑波大学

「理解」難しい"新構想"

「国際A級」って何?

筑波大が開学したのは一九七三年十月一日。当時の東京教育大が筑波に「統合移転」するという形で生まれたのだが、「筑波大が教育大から受け継いだのは図書館の本だけ」と言われるほど、筑波大は教育大とは異なる大学になっている。その「ちがい」が一般に"筑波大新構想"と呼ばれるものだ。

この"新構想"というのが実に難しいのだが、福田信之学長のさまざまな発言から察すると、これは「国際A級大学」というものらしい。これでは何のことかさっぱりわからないが、もう一歩推察してみると、これは、①学際的研究教育②開かれた大学③未来志向④責任ある管理体制—といった具合になるらしい。

まあ、とりあえず説明してみよう。

①学際的研究教育　筑波大の最大のセールスポイントになっている。筑波大に「学部」がなく、「学群」「学類」「学系」などとなっていることと関係がある。

従来の大学では、「講座制」というものがある。つまり、教授、助教授、助手などから成る講座に教授課程を終えた学生が入り、そこで、研究・教育の両方が行われているのである。ところが、この講座制には、とかくそれぞれの専門領域に閉じこもり、他の学問分野が目に入りにくいという欠点がある。そこで筑波大では、この「象牙の塔」的閉鎖性を打破し、学際的学問分野の充実を実現すべく、教育と研究の組織を分離、教育には学群、学類を、研究には学系を、というシステムをとったというわけだ。しかし、教育と研究を別個にしたとて、教授達の研究が即学際的になるというわけでもなく、まして学生のうける教育がいきなり学際性をおびるというわけでもない。第一、「学群・学類」という分類が、学外者にはわかりにくく(学内者にもわからないが)人文学類と比較文化学類はどうちがうのか、と知人に尋ねられて、絶句することも多い。これで今春には、「日本語・日本文化学類」なるものができるそうだから、さらに複雑になり要警だ。

②開かれた大学　要するに「社会に役立つことをしましょう」ということらしい。「社会に役立つ」情報処理の実習は全一年生の必修科目だし、語学の授業もLL機器を使用して行われる。あまり役に立たないというのか、人文・社会科学部門は質量ともに貧弱だ。

筑波大学内風景、右は中央図書館

今春には新学類も

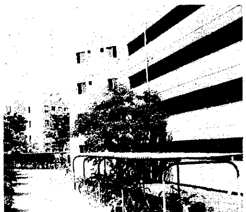
自転車は必需品

③未来志向　これが、また難しい。「国際関係学類が未来志向で第一学群は過去志向」と『明快』に説明してくれた先生もいるのだが、ここでは、福田学長が日頃口をすっぱくして言っており、たぶん今度の入学式でも言うのではと予想される次の言葉を紹介しておく。関係があるかもしれない。

「いくら大学の悪口を言ってもみんなが『筑波大学丸』の一員。『筑波大学丸』が沈んでしまえば、自分の人生の上で計り知れないマイナスがあるし、『筑波大学丸』が育てば、何年後でも大きなメリットがあることは間違いない」。

④責任ある管理体制　筑波大が「管理大学」と呼ばれる所以だ。端的にいえば、「講座」「学部」を解体したことによって、研究、教育から人事、財政にいたるまで、学長と五人の副学長に大きな権限が集中したということだ。これは"新構想"の中で最も問題視されてきた点でもある。

学生のビラや集会には、「許可制」が運用され、学園祭などをめぐって、常にこの「許可制」が問題となっている。昨年十月、学園祭問題に関して、学内に機動隊が導入されたことなど知っている人も多いだろう。



筑波大追越学生宿舎・全個室

宿舎は個室

次は、この筑波大での生活を少し紹介したい。ここでは幾つかの重要語句に注意してほしい。

まず宿舎生活では、ヨシイケ、女子棟参り、やどかり祭などが必修用語だ。筑波大の宿舎は、一般の寮とは異なり、ほとんどが「科挙」の試験場を思わせるような個室で、規則や門限があるわけでもない。学生アパートを大学が所有していると考えてもらえばよい。従って、食事は、自炊か外食、あるいは、宿舎の食堂で金を払って食べることになるし、風呂も二百円払ってはいることになる。その風呂、食堂、売店などを営業している業者がヨシイケだ。安くなく品数もなく、新鮮でもなく、うまくもなくてきれいでもないのだが、まあ、しかたがない。

毎年春の新入生の恒例行事が「女子棟参り」。だいたい四月から五月にかけて、同級、同郷、その他あらゆる伝手をたどって、女子部屋を訪れる男子学生で女子棟はごった返す。おかげで五月病にはかからずにすむ。そして、六月初めにある「やどかり祭(宿舎祭)」までにしかるべき相手が見つからなかったら、「女子棟参り」には一区切つけ、長期的作戦を練らなければならない。

宿舎以外の必須用語には、三学期制、スポーツデー、北京などがある。茨城県は、中学、高校は二学期制が多いのに、筑波大は三学期制をとっている。当然、試験も三回ある。また、春秋二回、授業を休みにして行われるスポーツデーは、「鬼っ子的」な学園祭とは異なる「全学的行事」で、みんなで東京へ行ったり、帰省したりして楽しく過ごす。

キャンパスが広いので自転車は必需品だ。朝のラッシュ時は、テレビでみる北京やニューデリーの風景を見るようで、筑波大の「国際性」を印象づけられる。

その他の重要語句としては、檀ふみの日(第二土曜日。金融機関が休み。キャッシュサービスも止まるので、仕送りがおろせない)、火曜ロードショー(筑波唯一の「映画館」である大学会館で毎週行われる無料の映画上映会)などがある。覚えておこう。(編集部)

図書館情報大学

なかなか厳しい講義内容

学生は七割が女子

"としょかんじょうほうだいがく"というのはとてもヘンな名前だ。うちの学生もみんなそう思っているけど近頃はだれもあえて言わない。それで"とじょうだい"と発展途上させたり、"じょうほうだい"とわざと少し誤解させたりしている。

"図書館"なんてカビ臭くって受験生たちのたまり場ってイメージがある。いくらかくたびれた本が沢山あって少し暗い、古くてどっしりした図書館を思い出す。なんとなく社会の表側から少しひっこんだ所って感じもする。けれども"情報"って単語は、"未来"とか、"最先端"、"ハイテック"なんかと勝手に並んじゃって、イマをときめいてしまっている。だから"図書館情報"ってハイブリッドさせてみごとにミスマッチ。なんだかわからなくなる。うちの学生だってわかんない。

うちの大学は、国立の四年生大学の中では最も小さな大学の一つだ。一学年が百二十名ちょっとで大学院も合わせて学生総数が六百名に足りない。その七割近くが女性でコンパで女の子が足りないなんてことはほとんどない。男性にとっては天国だろうとよく言われるけれども、うちの男達がみんな彼女を連れているというわけではないから現状を察してほしい。かと言ってうちの女の子達が男に不自由しているかというとそうでもない。隣には、あの筑波大学がある。女子寮にはお隣からのコンパの話が沢山降ってくるそうだ。つまりなるようになるのである。

大学の建物はみんな白い。最初の頃はほんとに純白で正門のところから池や築山を入れて上手な構図で写真をとれば、ちょっとしたリゾートホテルのパンフ用写真みたいだった。今は開学五年目だからも少し色あせた。でもやたら明るくなくていい。中庭は赤煉瓦敷きで自転車で走ると警備員に怒鳴られる。あたたかい時には今でもベンチで日向ぼっこしてたり、アイスクリームを食べたりしてて、ノンビリって形容が風景になっている。夜には池の周囲に灯りがともる。ラウンジのオレンジ色の照明も映えかなりいい感じの夜景だ。

小さな大学の割にはクラブは多いほうだろう。文系・体育系合わせて五十近くある。もちろん掛持ちも多く両手で数える程クラブに入っているやつもいる。コンパ目当てかと思うとそうでもなく、真面目に活動しているという青春の塊である。もちろんそれをものともせずクラブになんにも入らなくても学生生活をエンジョイしている人達も数多い。

大学の講義内容は女の子が圧倒的に多い割にはなかなか理系で、特に情報系の数学が厳しい。コンピューター関係の講義も内容がタップリある。言語は、フォートラン、コボル、パスカル、PL1など一通りみっちり仕込まれる。女の子には辛いだろうと思っていると結構けなげに端末をたたいている。どちらかというと男の方がだらしない。端末は学生用に三十数台開放されており、ミニコン用の十台と合わせれば、このような小さな大学の学生には、まあ充分な数だろう。テーマ研では、テーマにもよるがパソコンがかなり自由に使える。

もちろん図書館学の講義も卒業までに司書資格がとれるのに充分の質と量だ。

うちは新設大学の割には就職は良い方だ。情報・コンピューター関係ならかなりの大手でもなんとかなっている。就職担当の先生には、「システムならどこでも入れてやる!」とのたまった先生もいたそうである。その他に公共や大学の図書館はもちろんのこと、一般企業や出版社にも就職するのは難しくない。

とにかく筑波という特殊な土地で、図書館情報大学という特殊な大学だが、やりたいことがハッキリしているひとには、かなりお勧めの前途有望な大学だと思う。

(図情大四年　登　明弘)

図書館情報大学内風景

活字メディアの逆襲

ポスト受験の読書案内

受験生にとって活字とは、教科書に参考書、問題集、「天声人語」に小林秀雄というのが相場であろう。息抜きに読むのは赤川次郎か片岡義男か。約二か月後、めでたく合格の暁、受験の頸木から解放されて、活字とオサラバする人も多いだろうが、今回は敢えて「読書特集」を企画してみた。若者の活字離れが言われて久しく、出版業界も低迷を続けている。そんな中で、読者を若者に絞り、従来の書籍の概念さえ変えてしまうような試みも、中・小の出版社の中から生まれてきている。『週刊本』の朝日出版社、『カセットブックシリーズ』『G・S』の冬樹社、エロ本業界の〝維新軍団〟白夜書房はその最右翼に位置するであろう。今回はこの三社を代表する編集長に現在の出版界の状況および各社の出版に対する取り組み方についてインタビューし、まとめてみた。さらに各社の出版物のうち、特に受験生の諸君に推める五冊の本を選んでいただいた。

朝日出版社

知的格闘を"電車"の中で

ニューアカブームの先駆

一九七五年六月に創刊された『季刊・エピステーメー』は、構造主義以降のフランス思想を紹介し絢爛豪華、魑魅魍魎の如きデザインもあって一部の若者の間で、〝神話的〟な存在となり、現在の〝ニュー・アカ・ブーム〟の先駆的存在となっている。その『エピステーメー』を出版していたのが朝日出版社である。

もともと朝日出版社は、語学関係書の出版社であり、流通経路は大学生協を中心としていた。このため、大学生を対象に新たな読者を発掘しようという意図が、『エピステーメー』創刊の背景にあったという。（『エピステーメー』は七九年終刊）

『エピステーメー』以降、同編集部は第二編集部となり、『エピステーメー叢書』『レクチャーブックス』『リゾーム群書』など現代思想関係のシリーズを出版している。

また、M・フーコーの死を契機として、昨年十二月より『エピステーメーⅡ』が創刊され〝ニューアカ〟ブームの中、その動向が注目されている。

その一方、これまで一般図書を扱っていた第一編集部では昨年九月より『週刊本』を発刊している（この他、朝日出版社には語学関係の専門誌、教科書の編集部がある）。

暗中模索の出版界

「若者が活字離れしているとは思わないし、活字を拒否しているとも思わない」（第一編集部長、村上直哉氏）。

村上氏はむしろ、〝カタログ文化〟〝軽薄短小文化〟に容易に迎合し、雑誌創刊ブーム、文庫本ブームを作り出してきた送り手の側にこそ問題がある、としている。そのツケが具体的な形では、書籍の売り上げ高の低下という現象として廻ってきているという。

〝ニュー・アカ・ブーム〟に対しても、若者が〝硬派（？）〟の書籍に戻ってきつつあるというジャーナリズムの評価に村上氏は疑問を持っている。

「変化の兆しが見えた、という程度で、出版体系を揺り動かすムーブメントではない。浅田さんの本が一冊売れただけですからね」。

依然、出版業界は今後の方向性について暗中模索の段階だというわけである。

この状況の中で、村上氏は『週刊本』を〝実験〟として捉えているという。

村上　直哉氏

「節操のなさ」身上に

『週刊本』は毎月第二金曜日、三～五冊刊行されるが、新書判、泉貨紙、並装という軽く、持ち運びやすいマテリアルになっている。しかし、内容的には四方田犬彦、山口昌男、磯崎新など〝知〟の最前線に位置する人々の著作が含まれ、決して〝軽い〟わけではない。

「従来の読書スタイルは、ハードカバーの本と机に向かって知的格闘して、後は書棚に納めるというものでしたが、『週刊本』は要するに電車の中で2時間、知的格闘してあとはゴミ箱に捨ててもいいんじゃないか、という読書スタイルを可能にしています」。〝知〟を日常的なものとすることが物理的に可能な書籍を作り出すということだろうか。

また、「現在の〝知〟の形態がクロスオーヴァーして、ハイブリッドなものになっている」（村上氏）ことから、対談、インタビューという型式が重視され、田中康夫vs青木保、坂本龍一vs浅田彰の組み合わせは、実際かなり話題を呼んだ。

また、対談、インタビューという形式は〝速報性〟を可能にし「人間の生き方を考えるテーマ性を持った事を短期間に処理してみたい」（村上氏）という。『週刊本』は企画から発売まで遅いもので三ヶ月、早ければ四十日しかかからない。実際、この一月には小田晋筑波大教授のグリコ・森永事件を下敷きとした著書が出た。つまり、この試みにより日常的に見聞きする事件を〝知〟的に処理することが可能となるわけだ。

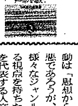
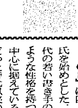
「『週刊本』では路線は引かない」という村上氏。著者の選び方あるいは、形態さえも読者の反応を見ながら軌道修正していきたいという。「節操のなさ」「変わり身の早さ」を身上として、あくまで〝実験〟に徹する構えであり、結果は「どうでるかわからない」（村上氏）。

今のところ『週刊本』販売部数三万～五万部。反響はむしろ、読者より業界筋からが大きい。

「それだけ業界では現在、活字のあり方に疑問を持ち、危機感を持っているということでしょう」（村上氏）。

〝知〟を日常化し、あるいは日常的なことを〝知〟として処理する『週刊本』の〝実験〟が果して成功しているかどうかは何とも言えない。今後の読者の反応がそれを決めることになるだろう。

編集長の選ぶ「我が社の五冊」

末井　昭氏（白夜書房）	村上直哉氏（朝日出版社）	竹下隆夫氏（冬樹社）
『写真時代』（月刊） 『写真時代Jr』（月刊） 『スーパー写真塾』（月刊）（以上白夜書房刊） 高級芸術宣言／高級芸術協会（JICC出版） 素敵なダイナマイトスキャンダル／末井昭（角川文庫）	ダーウィンを超えて／今西錦司＋吉本隆明 哺育器の中の大人／岸田秀＋伊丹十三 音を視る、時を聴く／大森荘蔵＋坂本龍一 リュミエールの闇～映画への漸新的欲望／四方田犬彦 自己愛人間～現代ナルシシズム論／小此木啓吾	なぜなにキーワード図鑑／山崎浩一 私という現象―同時代を読む／三浦雅士 反文学論／柄谷行人 相対幻論／吉本隆明・栗本慎一郎 マニア・マニエラ／ムーンライダーズ
		

冬樹社

既成のジャンルに呪縛されない

若い書き手の舞台『GS』

書店に行けば参考書売場に直行する受験生も一度は浅田彰の名前を聞いたことがあるだろう。彼はニュー・アカデミズム・ブームの火付け役となり、著書の『構造と力』、『逃走論』は十万部を超えるベストセラーとなった。〝スキゾ・パラノ〟は新聞の四コママンガにも登場している。その浅田彰が現在、〝たのしい知識〟のサブタイトルで不定期刊の『GS』を四方田犬彦や伊藤俊治と共に共同編集している。この『GS』を出版しているのが冬樹社である。

『GS』の他にも柄谷行人、川本三郎、三浦雅士、栗本慎一郎などポスト構造主義の流れを汲む批評家や思想家の本を送り出している同社編集長の竹下隆夫氏は浅田彰ブームの起こる以前から浅田彰を編集に迎えた出版物の企画をしていたという。

「文学が時代の表現を代表していた」（竹下氏）一九六〇年代、冬樹社は文芸出版社として安部公房や倉橋由美子らの文学作品や、外国文学の評論などを手掛けていた。この方針を変え始めたのは七〇年代の中頃から。文芸作品の売れ行きが悪くなり、次なる時代を表現していく書き手を模索していた時に現在冬樹社より著書を出版している書き手達と出会ったのである。その一人が浅田彰であったわけだ。

「浅田さんは今という時間を代表しうる言説をもっている人ですね。でもこんなに流行するなんて思っても見なかった」と竹下氏は笑いながら語る。

『GS』は四方田、浅田、伊藤氏を始めとした二十代前半～三十代の若い書き手の「舞台」となるような性格を持つ。若い書き手を中心に据えているのは文芸出版社だった時代以来の冬樹社の姿勢である。

また竹下氏は、冬樹社の出版活動は「思想から風俗に至るまで俗悪であろうが、先鋭的であろうが様々なジャンルを串し刺しにし得る視点を持ちたい」と言う。岩波を代表する人文関係の出版社が既成のアカデミズムのジャンルに呪縛されているのに対し、「そういうジャンル自体が無効なのじゃないかな。むしろ冬樹社という出版社が一つのジャンルでありたいね」と竹下氏は語る。

竹下　隆夫氏

る時が一番いい時でしょうね。でも『GS』という舞台に対して観客の賑わいがなくなったら『GS』も消えていくでしょう」。

カセットブックを実験

さて、もう一つ冬樹社が力を入れているのがカセット・ブック・シリーズである。これはカセットを聴きながら本を読むという〈ブック・パフォーマンス〉を目指している。今までの本のような活字だけの平面構成だけでは物足りない、メディアを立体化して見たらどうだろうかという編集部内の発想と、頭打ちのレコード業界の中ではボルテージの上がらないミュージシャン達のメッセージを多元化して伝えたいという希望が、かみ合って〝出版〟された。また如月小春の『リア王の青い城』のように演劇を紙と音で表現するものもある。だが音を売るという商売をしたことのない書店の対応は当初冷淡で、店頭に並ぶようになるまで三ヶ月以上かかったという。「まだ実験的な段階ですからね。でもこれからはレコードを四十～八十万枚売るアーティストも登場させていきたいと思います」。

しかし、「ただ遊びとして本に一枚の衣装を着せただけで、何か革命的なことを狙ったというわけではありません」と語る竹下氏は本の新しい形態を〝模索〟するというより本作りを楽しんでいる感じだ。

また、冬樹社では今年の二月から『GSファイル』の出版も予定している。『GSファイル』とは読者が雑誌の記事で読みたいものだけ選択できるようソフトだけ売る――つまり、ルーズ・リーフに印刷されているのである。ハードとしては既成の二十六穴バインダーを使うことになる。『GS』の執筆陣や蓮實重彦、浅田彰、多木浩二などの評論家、思想家の論文、あるいはパフォーマンスや発言を〝鮮度〟を重視してファイル化する。しかしファイル化することにどんなメリットがあるかというと「いや、まだわかんないですよ」と竹下氏は言ってのける。

まとまった情報を読者に

現在若者の〝活字離れ〟が指摘されているが、竹下氏はその意見に疑問を感じている。「かつては書籍がまとまった情報を提供する数少ないメディアだった。現在、本を読まなくなったとはいえ若い人達は活字から離れているわけではなく、むしろ他のメディアで氾濫する活字情報に侵されているんじゃないかな。問題はまとまった情報を読者にどういう形で届けたらいいかということだけなんですよ」。

白夜書房

単なるエロ雑誌に留まらぬ編集

エロ雑誌のデパート

白夜書房は、今から十年前に、『セルフ出版』という名で編集者一人でスタートした。

それが、現在『写真時代』『スーパー写真塾』など、発行部数十万部を超える四誌を含め計十五誌までに、急成長してきている。〝エロ本のデパート〟と呼ばれる売り上げ高も約三千社中第七十位（今年度推定高約三十億円）に位置しており、高田馬場に自社ビルを構えている。

出版物の中で最も売れている『写真時代』（月刊）は、三年前、白夜書房が出版していた雑誌はほとんど売れず倒産に追い込まれそうになった頃に、社運を賭けて出版されたものである。その『写真時代』が、今や公称部数三十二万部という大成功をおさめているのである。

「『写真時代』は、普通の写真雑誌では載らないクズの写真を拾い集める事を積極的に行ってます」と話すのは『セルフ出版』からの編集者で、今や白夜書房の看板編集長、末井昭氏。そして、この雑誌はもともと小学館の『写楽』に対抗するため創刊したものだと言う。

『写真時代』の前身とも言える『ウィークエンド・スーパー』という雑誌で荒木経惟氏が『劇写・女優たち』というコーナーをやっていたが、それが『写楽』で篠山紀信氏がやっている『激写』コーナーと発音が同じであるという理由で小学館がクレームをつけてきたことが事の発端。これに怒った末井氏は『ウィークエンド・スーパー』を『写楽』と同じ体裁で『写楽』の三日前に発売、『写真時代』と名称を変更した。結局、この対決は荒木経惟氏VS篠山紀信氏という形になったが、現在『写真時代』が『写楽』を部数的に追い抜き圧倒したところから勝負が着いたといわれている。末井氏は勝利をおさめることとなった原因について「荒木さんの写真はドラマなんですよ。そして、それが現実とはまったく関係のない一つの事件として展開するんです。それに、荒木さんは、何もかも他人に準備してもらって、シャッターだけを押す篠山さんとちがって一人でもチームでも動ける幅の広い人ですからね」と考えている。

末井　昭氏

一風変った編集者たち

現在、白夜書房編集部は四つの班に分かれていて、『写真時代』や『スーパー写真塾』などを担当している末井班の他に、『ヘイ！バディ』などが担当している中沢班、『漫画ブリッコ』などを担当している西尾班と単行本関係の班がある。編集者と言えば、インテリというイメージが強く、エロ雑誌業界においても〝学生運動クズレ〟が多いといわれるが、白夜書房では、そういった人や大卒者が約半数ほどしかいない。末井氏自身「うちの編集者は、大手のサラリーマン出版社の中ではやっていけない奴ばかりだけど、みんな雑誌をつくることがすごく好きでね」と言う。白夜書房には、そんな彼らが制約の多い大手では難しい自由な編集ができる環境があるのだ。「成功の要因ってのは、一つに運が良かったこともあるけど、やはり、つくって面白い雑誌しかつくらなかったこと。つくって面白い雑誌じゃないとつくる側も飽きるし、そんな雑誌を読んでも面白くないだろうと思う」と末井氏。

また、つくる側として特に読者の事を意識していないのも特徴のようだ。末井氏は「千部、二千部ぐらいなら読者を想定できるけど万単位以上になったら最大公約数にはいらない人も多いからね。正直言って読者のことはわからない」と話す。

白夜書房は、その出版物の性格上、警察、世間の風当たりも強く編集者が月一、二回、警察に呼び出されるのも日常茶飯事、発禁をくらったものも数多い。それを次から次へと廃刊、創刊を繰りかえすことで乗り切っていった。また特に末井氏は単なるエロ雑誌に留めなかった。彼自身の広い交遊関係を生かしてどんどん周辺分野の人間（南伸坊氏、上杉清文氏、栗本慎一郎氏など）を登場させて新しいタイプのエロ雑誌を作り上げたのである。一つの雑誌が成功すると、次々とその姉妹誌を創刊していくのも新しい戦略だった。しかし、売れずに終ったものも多く（例えば高級映像文化誌を標榜した『写真時代21』）そういったものは当然編集者も作るのに飽きていたわけである。

末井氏は現在の状況についてこう考える。「昔のエロ本っていうのは読者に嘘をついて男の幻想を勝手に刺激していたんだ。あと一歩のところで隠しておいてね。ところが、今はすべて見せるから、男の勝手な幻想が崩れちゃったんですよ。だから、うちが出している雑誌で、読者が本当に興奮しているかっていうのは疑問だね。僕自身は、嘘をついて本をつくるっていうのは、つくる側として面白くないと思うから、今の傾向は好きだけどね。ここまできた以上、これからは内容の変態化っていうのが一つの方向だろうと思う。それもSMとかそういうショービジネス化されているものじゃなくてもっと奇妙な変態を載せるっていう事なんだ」。

作る側も楽しんでいる

編集者自身が、まずつくって面白いと感ずる雑誌を白夜書房は作ってきた。白夜書房が、今の若者にウケている理由は、作り手が時代の流れを敏感に感じ取り、それを自ら楽しんで作っているからではないだろうか。白夜書房のそれぞれの編集者は、一年に一冊新しい雑誌を創刊しなければならないというノルマがある。

「ぼくらは、何と言っても面白いことにしか興味がないからね。ぼくらは、自分達も含めた大衆相手のエンターテイメントの前衛だと思う」と末井氏は言っている。

変動期の学生メディア

筑波学生新聞のご紹介

筑波大学にはなぜか別称、愛称、仇名の類が矢鱈ある。いわく「管理大学」「国際A級大学」「国内B級大学」「3S（スポーツ、スタディ、セックス）大学」「タカ派の牙城」「物理体育大学」――。

あまりありがたくないものも多くあるが、これはあのクリモト教授が言うように筑波大学が「〝生きたプロセス下の〟大学」だからだろうか。つまり、この大学はまだ変動期でゴタゴタしているのでブランド・イメージがはっきりしないのだ。（もっとも「タカ派」は学長のイメージもあって定着しているよーな気もする）。

大学がまだ変動期ということはトーゼンのように〝事件〟がおきているということだ。新聞の地方版に目を通したりする地味な受験生諸君は時々、筑波大学の記事を読むことがあるだろう。「筑波大生村長選で選挙違反」「筑波大生飲酒運転で死亡事故」「学園祭は中止に」「学園祭問題で機動隊導入」等々いまどきの大学では滅多にないような記事が多い。

筑波大学のある学園都市に目を転じてみれば、科学万博を横綱に序二段、序ノ口クラスまで大小の〝事件〟がコロゴロ転がっている。こちらも変動期であるらしい。

こんなにたくさんの〝事件〟を放っておいて退屈するのはモッタイない――というので作っているのがこの「筑波学生新聞」なのである。

実はあの筑波大学のことであるから、そうヤスヤスと創刊させてくれたわけではない。

この「筑波学生新聞」はもともと筑波大学が発行している「筑波大学新聞」だったのである。八一年大学当局が学生には編集権がない、という規則を作ってしまったので学生編集委員（つまり記者）が全員やめ、新たに筑波大学学生新聞会を創設。しかし、八二年二月にあっさりサークルとしては不許可、学外に出て「筑波学生新聞」を創刊したのである。それから約三年、幾多の辛酸をなめ、苦難を乗り越えて筑波大学最強かつ最大の、全国でも屈指の学生メディアに進歩発展向上したのである（ということにしておこう）。

このように「筑波学生新聞」はタイソウな代物であるので、全ての受験生は是非購読していただきたい。運命の荒波にホンローされ筑波大学に入学してしまった人は迷わず入会して欲しい。